

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 堀内淳一

中国には天下を舞台にした正統論がある。どの王朝が天下の正統であって、どのように自らの王朝にいたったかが歴史的に回顧される。正統が議論される舞台は、「八紘」などと称されたいわゆる郡県統治の「中国」であり、遼代以後は、その「中国」の外から支配に臨んだいわゆる征服王朝について議論されるようになる。唐代までに建国された非漢族の王朝は、「中国」の外から「中国」内に侵入して国を建て、漢族の文化に融合していった面が強調される。歴代、往々にして「中国」内には複数の正統が併存したが、相互に対立するそれぞれの王朝は、自らの王朝がいかに正統であるか、併存する他の王朝がいかに正統でないかを論じる必要にせまられた。本論は、この相互に対立する王朝が併存した三～六世紀について、非漢族王朝である北朝の正統論を、漢族文化への融合という多くの論者が注目してきた論点にあらためて注目しつつ、掘り下げている。

正統観をめぐるどのような自意識が、具体的にどのような形となって現れているか。北朝は文学の分野で南朝と争うことをさげ、弁舌の優位、威厳ある所作をもって使者を選び、外交の場での優位性をアピールしようとした。使節が北朝・南朝間でやりとりしたモノは、北朝が南朝に対し優位の議論が可能な柑橘、南朝が北朝に対し胡の性格が議論できる軍馬であった。北朝の使者が帰国後に就いた官職からは、時期を追って求められるものが変化した様が見て取れ、国境防備の地方官への任用を主とする状況から、中央官への就官が増える後の変化が指摘できる。南朝から北朝への亡命者は、多く亡命者の師弟を幕僚として採用していて、彼らが政治集団を構成していたことがわかる。具体的に河内の名族司馬氏を検討すると、東晋の宗室であった司馬氏の名声の役割が期待された孝文帝以前と、司馬氏が漢族名氏族のひとつにすぎなくなるその後に分けることができ、北朝が南朝との関わりから彼らに何を求めたかがわかる。北朝の胡族が、自領内の漢族をどうおさえるかの要請が亡命者の扱いに具体化している。また北魏後期の南北朝間の外交が断絶している間も、北魏宗室の南朝への亡命、一部の北帰にあたっては、北魏における亡命者集団の役割や南朝側の北帰にことよせた期待を読み取ることができる。

本論の特徴は、馬や柑橘などのモノや亡命氏族に焦点を当てた点に求められる。使者の官職や亡命氏族の官爵の分析を通じて使者の役割や亡命氏族の位置づけを探り、司馬氏の一族を追って亡命氏族の北朝社会における地位の確保の仕方などを論じた点は北朝史研究に有意義な視点を提供している。司馬氏の具体的検討内容は、対象を他の氏族にひろげ得れば、より大きな広がり期待できよう。以上によって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいと判断した。